がんの治療と子どもをもつことについて

妊よう性とは「妊娠するための力」のことをいいます

　妊よう性は、女性にも男性にも関わることです。妊娠には卵巣、子宮、精巣などの生殖機能をもつ臓器が重要な役割を果たしています。

　がんの治療では、がんができた臓器だけでなく、他の臓器にも影響がでる可能性があります。そのため、妊娠するための力が弱まったり、失われたりすることがあります。この影響は、治療中だけでなく、治療後に出てくることもあります。

　がん治療による生殖機能への影響

手術療法・・・両側卵巣・子宮、両側精巣の摘出などが不妊の原因になります。

化学療法・・・抗がん剤の種類や投与量により卵巣機能・造精機能などに影響があります。

放射線治療・・・照射量や部位により、卵巣機能・造精機能、脳で分泌される生殖機能に関するホルモンなどに影響があります。

将来子どもをもつことについて、がんの治療前に考えてみましょう

　がんの治療の進歩によって、多くの若い患者さんががん治療を無事に乗り越え、その後の長い人生を歩まれます。近年では、将来自分の子どもをもつ可能性を残すための方法の一つとして、「妊よう性温存」という選択肢も加わってきました。

　妊よう性温存療法には、以下の方法があります。

（女性の場合）

パートナーがいる方は、受精卵を凍結する方法があります。

パートナーがいない方は、卵子を凍結する方法があります。

そのほか、卵巣の組織を凍結する方法もあります。

（男性の場合）

精子を凍結しておく方法や精巣内にある精子を採取する方法もあります。

※早期に生殖医療専門医を受診し、あなたの現在の生殖能力や、適切な妊よう性温存の方法を確認することを、おすすめします。

兵庫県には医療費助成制度があります。（年齢・回数制限あり）まずは、がんの治療を受けることが大前提ですので、必ずしも希望通りにならない場合もありますが、将来子どもをもつことを望むのか、治療前に考えてみることも大切です。

妊よう性に関する疑問や自分の気持ちを医療者に伝えましょう

将来子どもをもつことについて考えるためには、医療者に気持ちを伝え「がんの治療によって生殖機能にどのような影響があるのか」や「がんの治療後の見通し」を確認する必要があります。その上で、妊よう性温存を検討する場合は、生殖医療を専門とする医療機関を当院からご紹介します。

当院の相談窓口

・治療を始める前に医師、看護師にご相談ください。

・がん相談支援センター（神鋼記念病院　敷地内薬局 2 階）で相談（無料）

治療中・治療後に妊よう性に対する気持ちが変化しても、相談できますので、一人で悩まずに、まず相談しましょう。

将来子どもをもつかどうかは、ひとりの問題ではありません。パートナー、ご家族などと、がんの治療による生殖機能への影響について話し合うことが大切です。

2024 年 3 月作成　神鋼記念病院　AYA 世代支援チーム